令和５年度　現地見学会　開催報告

所属　株式会社四電技術コンサルタント
氏名　森實　良子
部門　建設部門

はじめに

愛媛県技術士会主催の現地見学会は、昨年度まで新型コロナ感染症の影響により開催を見送っていましたが、令和５年５月より第５類感染症に移行したことを踏まえ、今年度は４年ぶりの開催となりました。

松山市立埋蔵文化財センターのご協力を賜り、松山市考古館及び湯築城跡の見学会を開催しましたので、ここに報告いたします。

日　　時：令和５年 11 月 11 日(土)　13:00～16:40
場　　所：松山市考古館、湯築城跡
参加人数：15 名

松山市考古館にて

修復作業場の様子

松山市考古館

松山市考古館は、先人から受け継いできた数多くの埋蔵文化財を保存し、後世に伝えていくことを使命として、松山市内における埋蔵文化財の発掘調査・研究及び資料の整理・保存・収蔵・公開を行っている機関です。

今回は、梅木館長にお取り計らいいただき、展示室だけではなく、出土品修復の作業場や収蔵庫など、バックヤードの見学ツアーも行っていただきました。

作業場では、土器などの出土品の修復作業についてご説明いただきました。小さな破片もひとつひとつ、柔らかい豚の毛のブラシで汚れを払い、いつ、どこの遺跡のどの場所で出土したものか、とても小さな字で記されていました。修復には、隙間を埋めるため、セメダインを使用するとのことで、着色もされるとすっかり完成品のようでした。修復した土器やナウマンゾウの牙もさわらせていただき、ナウマンゾウの牙は、中島沖でよく網にかかるとのことでした。

次に、収蔵庫を案内していただきました。収蔵品はランク分けをし、考古館には、重要度の高いＡ～Ｂランクの収蔵品を保管しているとのことで、膨大な収蔵品が納められている棚は圧巻でした。発見された埋蔵物は、文化財となる前に遺失物として警察に届け出る必要があることをお話しいただき、現代まで人類の生活が延々と続いていることを感じました。

昔のネガ・ポジ写真など資料の保管庫や記録本を作成する部屋も見せていただきましたが、松山市内だけでも多くの遺跡があり、そこから出土した多様な埋蔵物を修復して保管する、時間のかかる大変な作業であることがよくわかりました。

来年、古代ハスが咲くころにまた伺いたいと思います。

出土品の破片（左上に記入あり）

収蔵庫の様子

湯築城跡

湯築城跡は、風早郡河野郷から出た、伊予の豪族河野氏が道後に築き、14 世紀前半から 16 世紀後半にかけて約 250 年間存続した湯築城の城跡です。昭和 62 年の動物園の移転に伴う発掘調査により、屋敷群などの遺構が良好に保存されていることが確認されたため、現存する外堀や土塁とともに国の史跡として指定、保護されています。

ここでは、湯築城資料館の神石学芸員より、各遺構を巡りながらご解説いただきました。

まず、最初に訪れた武家屋敷は、発掘された間取りのとおりに、「千年の釘」と言われる和釘を鍛造する鍛冶、白鷹幸伯氏の釘を使用して復元されているとのことでした。屋敷外の土塀は、耐震構造としつつも当時の土壁を復元しており、大雨のたびに土が崩れるとのことで、文化財を保護することの努力や大変さを感じました。

外堀土塁展示室では、土塁の地層断面を樹脂で薄く固めて展示しており、掘った順に土を被せたために上の方が古い地層になっている状況が確認でき、土塁の築造過程がよくわかりました。

その後、外堀土塁に沿って移動しながら、道路や排水溝があったこと、大手門から城内の様子を見えないようにするための遮蔽土塁があり、その下の石積みの一部は当時のままであることなどをご説明いただき、当時の街並みや生活が今に続いていることを実感しました。

また、松山城の石垣には湯築城の石垣が使われていると言われているが、湯築城は石垣のない城であったこと、北側の外堀の歪曲は、鬼門か、道後の岩が固くて掘れなかったか、旧河道か、などの議論があるとのことで、まだまだこれから長い歴史の一部が明らかになっていくのだと楽しみに思いました。

最後に、ボランティアガイドの方に、折り紙の兜をお土産にいただき、解散となりました。

武家屋敷の様子

外堀土塁の地層断面

おわりに

今年度は、松山市立埋蔵文化財センターのご協力を賜り、大変充実した見学会となりました。ここに厚く御礼申し上げます。

来年度以降も、様々な趣向で見学会を開催できればと思いますので、積極的にご参加くださいますよう、今後ともよろしくお願いいたします。